戦時下における精神動員の一考察
～「愛国百人一首」を通じて～』

永島雄介

序章
第一章　愛国百人一首の作成過程
　第一節　作成過程
　第二節　作成以前の取り組み
第二章　愛国百人一首の特色及び分析
　第一節　選定基準
　第二節　内容分析
第三章　愛国百人一首の普及策及び影響
　第一節　言論による普及
　第二節　かるたによる普及
　第三節　イベントによる普及
　第四節　芸術による普及
　第五節　その他の普及策について
終章
付録　愛国百人一首総覧

序章

日本は米英を中心とする連合国に対して、昭和一六年一二月八日より三年以上にわたって「総力戦」である太平洋戦争を戦った。政府はそのような戦時下、物資や金、人力のみならず国民の精神、つまり心の中までをも動員する必要性があった[1]。国民の心を戦争へと向け、また愛国心を高める必要があった。その精神動員に用いられた媒体は新聞や書籍、音楽、映画など多岐に渡るが、その中の一つに“愛国百人一首”がある。

愛国百人一首とはそれまで広く親しまれていた小倉百人一首に代わるものとして、昭和一七年一一月二〇日に内閣情報局か

ら発表されたものである。この取り組みは日本文学報国会[二]の立案によるものであったが、情報局が後援し、大政翼賛会が賛助していることから国家の関与が大きい文学作品であると言える。またその選定にともない、東京日日(以下『東日』)、大阪毎日(以下『大毎』)の両新聞社が参考資料提出に協力し、この両社は紙上で一般国民に公募している。加えて選定委員には当時の文壇の著名人が名を連ね、作品の普及にも各方面からの協力が寄せられた。つまり本作品は国内の総力を挙げて作成されたものであるとも言える。

本論文では精神動員政策の一例である愛国百人一首を取り上げ、計画、作成、効果、影響の観点から当時の新聞や雑誌、書籍等に考察を加えることによって、日本が戦時色へと染まっていく過程の一部を明らかにし、また当時の世相の一端を繙いてみたい。

第一章　愛国百人一首の作成過程

第一節　作成過程

愛国百人一首は前述のように、昭和一七年一一月二〇日に情報局から発表されたわけであるが、本作品はどのように作成されたのであろうか。情報局や文部省の公文書、日本文学報国会等の機関紙の中では、この過程に関する文献は管見の及ぶ限り存在しない。よって発表後、雑誌上で行われた座談会[三]を主な資料としてその過程を明らかにしていきたい。

愛国百人一首作成は黒崎貞治郎(東京日日新聞社文化部長)が情報局へこの企画を持ち込んだことに端を発する。すでにそれ以前から情報局第五部では「昭和百人一首」という名で記紀万葉から現代の前線の勇士までの歌の中から本当に一億国民が朗詠すべき百首を選び、全国的に普及させたいという希望があったようである。また文学報国会短歌部会にも以前からそのような希望があったため、政府・新聞社・文学報国会短歌部会の三者が協力し、この企画に当たることになった。

次に実際の選定にあたる委員、顧問などの関係役職が決まった。選定委員は佐々木信綱、斉藤茂吉、太田水穂、尾上柴舟、窪田空穂、折口信夫、吉植庄亮、川田順、斉藤瀏、土屋文明、松村栄一、北原白秋[四]の一二人が短歌部会の推薦によって決まった。次に選定顧問には川面隆三(情報局第五部長)、井上司朗(同第三課長)、相川勝六(大政翼賛会実践局長)、高橋健二(同文化部長)、生悦住求馬(文部省社会教育局局長)、大岡保三(同国語

課長)、谷萩那華雄(陸軍省報道部長)、平出英夫(海軍省報道部課長)、関正雄(日本放送協会事業局長)、徳富蘇峰(日本文学報国会会長)、下村海南(同理事)、平泉澄(東京帝国大学文学部教授)、久松潜一(同教授)、辻善之助、井野邊茂雄の一五人が委嘱された[五]。また幹事は久米正雄(日本文学報国会事務局長)、甲賀三郎(同総務部長)が務めることになった。このように情報局や文部省、大政翼賛会等の人物が顧問として参加しており、選定作業には文学報国会が主な役割を担いつつも、政府の意向が大きく反映されていた。この点からも本作品が持つ公的な意義を読み取ることができる。

続いて行われたのが推薦歌募集であるが、昭和一七年九月一七日の『東日』[六]、一八日の『大毎』上において公募され、両紙は紙面を大きく割き「希くは全国民挙つて、この快挙に賛せられ（中略）奮つて協力されんことを希望する」と、推薦歌を強く募集している[七]。ちなみにこの企画立案に対する反応は、全面的に協力した東京日日・大阪毎日[八]だけでなく、他紙にも表れている。例えば『読売報知』は、日本精神の生活化は演壇から説いただけでは効果は少なく、健全娯楽の中から生活化されるものがあればそれに越したことはない、と愛国百人一首選定を評価する井上司朗の談話を掲載している[九]。この募集に対する国民の投稿は非常に多数あり、一〇月一〇日時点で推薦葉書は概算二万にも上ったとされている[一〇]。結局、推薦歌は延べ十二万首にも上り[一一]、当時の国民がこの様な企画を如何に歓迎したかが読み取れる。

次にこれら一般国民よりの推薦歌に更に、「各層人士」の特別推薦歌、報国会短歌部門の幹事[一二]及び選定委員の数氏より提出された推薦歌を加え、それらを参考資料として選定会議に入ることになる。会議は文学報国会短歌部会において全七回にわたって行われた。特に第六回の会議には選定委員一一人の他に情報局、文部省などからも選定顧問が駆けつけ、一一時間にもわたって大いに議論が交わされた[一三]。

こうして選定された百首は「愛国百人一首」として昭和一七年一一月二〇日、情報局より発表された。『東日』、『大毎』、『朝日』、『読売報知』の新聞各紙は選定された百首を、紙面を大きく割いて掲載している[一四]。愛国百人一首に対する反響は新聞や雑誌などに多数見られるが、これについては第三章で詳述する。

第二節　作成以前の取り組み

愛国百人一首作成の経緯については前述したが、実はそれ以前にも百人一首による精神動員の取り組みは存在していた[一五]。

その中でも注目すべきなのが、川田順[一六]が雑誌『キング』上で昭和一五年一一月から昭和一六年六月にわたって大々的に掲載した「愛国百人一首」である。これは出版社である大日本雄弁講談社から川田に依頼して行われたものであった。その中で川田は「筆者序」として「忠君愛国の短歌一百首を選び、仮りに『愛国百人一首』と名づく。日本精神の言葉の花は、その背景なる歴史的事件と相俟って、一巻の絵巻の如く繰り広げられるであろう。」と述べ[一七]、この百人一首を精神動員の手段として位置づけている。また内容に目を移してみると、川田は一句一句について丁寧に注釈を施している。ここからは川田がこの取り組みに如何に尽力したかが読み取れよう。川田はこの後報国会版「愛国百人一首」の選定委員にも名を連ね、両者の「愛国百人一首」について評釈本[一八]も著している。この川田版「愛国百人一首」と報国会版「愛国百人一首」との相違点は、選定が川田個人の主観によって行われていること、選定対象期間を広く捉えていること[一九]、また「愛国」の概念を比較的広義に捉えていること[二〇]などにある。しかし両者に多くの歌、作者において重複があることから前者は後者に先立つものとして位置づけるべきである。つまり政府が関与した報国会版「愛国百人一首」が作成される以前に、民間レベルから愛国心昂揚に関する取り組みが行われていたのである。

しかもこの川田版「愛国百人一首」には当時大きな反響があったようで、『キング』には読者から「時節柄まことに意義深く且つ有益この上なきことと存じ(中略)愛国百人一首を提唱する運動を御社の力と努力とを以て断行願はるれば全国的室内娯楽をして高尚且つ剛健ならしめるものと愚考仕り候」、「読めば読むほど頭の中に横溢する愛国の熱情に血が沸き立つ思いが致します。これによって世の惰弱なるもの凡てが毅然として奮ひ立つことと信じます。」といった投稿が寄せられ[二一]、取り組み自体への賛辞や、今後の展望への期待が寄せられている。これは川田の取り組みが当時の国民からある程度の支持を得たことを表しており、愛国心昂揚の取り組みを受容する雰囲気を窺い知ることができる。

第二章　愛国百人一首の特色及び分析

第一節　選定基準

百人一首には小倉百人一首を始め、非常に多種の存在が確認されている[二二]。愛国百人一首もその一つであるが、本作品はそ

の作成意図、性質ともに他のそれと一線を画すもので、本節ではその作成意図及び特色について考察を加える。

まず作成意図についてだが、「愛国百人一首」という名の通り、それは戦時下の国民の愛国心・戦意鼓舞にある。選定委員である窪田空穂は選定の意義につき、和歌を通しての現在の指導精神であることはもとより、将来へも伝えられるべき事業であると信じ、現在及び将来に対して和歌を通しての指導精神を示すことを挙げている[二三]。前述したように、この愛国百人一首には政府が関与し、またその中でも情報局は大きな役割を担っていた。厳しい太平洋戦争を戦い抜くため、精神動員が重要視され、当作品はその一貫として作成されたことが再確認できる。

次にその選定基準について述べる。まず第一に選定対象時代を万葉時代から幕末までとした点である。これは作業上の理由によるものであり、この百人一首には明治時代は含まれていない。尊王攘夷、愛国の精神指導という目的に鑑みれば、明治以降の歌も含めた方が効果的のようにも思え、実際この基準設定に対しては遺憾の意を表する論稿が見受けられる。例えば『大毎』上に見られる、支那事変及び大東亜戦争の兵士による前線短歌作品が含まれないことがただ一つ遺憾である[二四]、とする論はその一つである。

第二に「愛国」の範囲についてである。選定委員の吉植庄亮は、日本の国土を礼賛している歌や家族主義に立脚する夫婦親子の愛情、季節の美など、極めて優れた歌があればそれも良いという話になった、と発表後の座談会[二五]で述べ、また同じく選定委員の窪田空穂によれば、天皇や皇国、皇祖の生んだ国土を礼賛すること、さらには母性愛、夫婦愛など身近な事柄も「愛国」に含まれるとして、その概念を広義に捉えている[二六]。これら選定委員の言から、この考え方は公式見解と考えて良いであろう[二七]。

第三に、愛国の精神を基礎としながらも和歌として価値の高いものを選出したという点である。これは一つの作品として単調を来たすことを回避するためである[二八]ということだが、ここには文学的配慮が見て取れる。

総じてみるに愛国百人一首は戦時下の精神動員のための一つの道具として用いられたことは無論であるが、その反面ある程度の文学的配慮がなされていることがわかる。「愛国」を強調する余りに国民に敬遠されることを避け、そして作品を広く国民に流布させるための配慮と考えてよいであろう。

第二節　内容分析

第一節では愛国百人一首の目的、特色について考察を加えたが、本節ではその内容について以下五つの観点から分析をする。

第一に作者の性別でみると男性九六人、女性四人[二九]という結果になり、圧倒的に男性の歌が多いことがわかる。銃後の指導精神という目的を考慮した場合、女性の歌を選定することも効果的のようにも思える。これについては選定後の座談会[三〇]において吉植庄亮が、なんとかして女性の歌を百人一首の中に採り入れたいというのが皆の意見であり、女性の歌がたった四首しかないということは非常に心淋しく感じる、と述べているように選定において意図的に女性の歌を除外したわけではないようである。女性の歌が少ない要因としては、百首の出典が日本の国難に面した時代に多く、必然的に男性の歌が多くなったこと、上代より中世にかけての女性の作者はいずれも本名を表していないため、「詠み人知らずのものや、歴史性の確実でないものは資料に加えない」という選定基準[三一]の影響も考えられるであろう。また当時、相対的に男性の地位が重視されていたことも関係していると思われる。

第二に作成時代でみると、飛鳥藤原時代二首、奈良時代二一首、平安時代一〇首、鎌倉時代七首、吉野時代六首、室町織豊時代三首、江戸時代五一首と分類できる[三二]。これらの中でも特にその数が多いのが防人、元寇、幕末に関する歌で、防人関係六首、元寇関係三首、幕末関係二七首が選ばれている。これらの時代に共通するのは外敵の存在であり、愛国歌としてふさわしい歌は国難に面した際の護国精神を包含するものとの見解に基づく選定だったのであろう。また井上司朗は、万葉時代は外敵の侵入、侵略に対して国内が一致結束しなければならず、幕末は日本の国体を明徴にする必要に迫られ、日本精神の振起が強く要求されたと述べている[三三]。すなわちそれらの時代の情勢を太平洋戦争下の当時に重ね合わせることで本作品にリアリティを持たせ、広く国民の理解を期待したということも推測できる。

第三に歌の内容に基づいて分類したところ、天皇忠誠二七首、天皇礼賛一八首、戦意高揚一九首、国土愛二二首、家族愛六首、その他(人倫等)八首となった[三四]。短歌研究者である木俣修は著書[三五]の中で愛国百人一首の選定につき「結局は狭義の愛国歌が主として選ばれた」と述べている[三六]。しかしこの結果から分かるように愛国歌と言っても、それに含まれるメッセージは多岐にわたっており、実際の選定においてある程度「愛国」の概念を広義に捉えた選定が行われたことの証拠となる。この企画の

目的が国民の精神昂揚にある以上、その対象には戦地で戦う兵士のみではなく、銃後の女性や子供なども含まれる。それらが総合的に勘案された結果、国土愛や家族愛を説く必要性があり、また効果的であるとも考えられたのであろう。

第四に「作者身分」、第五に「作者年齢」という観点からの分類が挙げられる。作者の身分については各人の身分が多様であることから単純な分類は困難だが、それは歌人、学者、貴族、武士、祭祀、公家、僧侶、豪族など非常に広きにわたる。また年齢についても下は渋谷伊豫作、森迫親正の一七歳から、上は尾張濱主の一一三歳まで認められる[三七]。これらの事実から、身分や年齢などを問わず日本人たるもの、総力を挙げて戦争を戦い抜くために努めるべきという指導精神を読み取ることができる。当時の「総力戦」に大きく寄与しようとする姿勢が、この愛国百人一首からは感じられる。

第三章　愛国百人一首の普及策及び影響

第一節　言論による普及

愛国百人一首は昭和一七年一一月二〇日に情報局より発表されたが、その後はそれを広く国民に流布するため普及活動が行われ、様々な媒体が用いられた。『東日』によれば、発表直後から製作に関与した情報局、大政翼賛会、日本文学報国会、毎日新聞社は普及徹底のために普及委員会を組織し、その普及手段として、かるた、評釈本、朗詠発表、講演会、書道、絵画、音盤、舞踊化などの企画が既に進行中である[三八]、としている。本章ではそれらの普及方法につき考察を加えるとともに、当時の国民がこの愛国百人一首をどのように捉え、いかなる反応を示したかを論じたい。

愛国百人一首は、まず各新聞紙上で発表された。発表には各紙とも大きく紙面を割き、他に情報局発行の『週報』[三九]でもそれは紹介された。その発表を受け各新聞社は歌の正しい意味、その歌が詠まれた際の背景などを正確に理解するための評釈、愛着を深めるための書道作品、絵画をシリーズ企画として発信している。例えば参考資料提出に協力した『東日』、『大毎』はそれぞれ選定委員による評釈を掲載し[四〇]、特に『大毎』ではそれとは別に書道と絵画の連載も行っている[四一]。その担当は後藤文夫、徳富蘇峰、荒木貞夫など、錚々たる顔ぶれである。また『朝日』においても全二〇回にわたって評釈、書道作品、絵画が掲載されており[四二]、こちらも評釈は川田順、書道は尾上柴舟

の両選定委員が、絵画は堂本印象、中村岳陵など総勢八名の著名な画家[四三]が担当している。

また雑誌においても同様の取り組みは行われた。例えば『家の光』では「愛国百人一首物語」として宏覚禅師、今奉部興曾布などの歌について、その作歌背景とともに注釈が施されている[四四]。そしてそれらの歌が包含する教訓として「国体明徴」、「滅私奉公」、「八紘為宇」、「一億一心」、「米英撃滅」などを紹介し、愛国百人一首の普及に一役買っている[四五]。

さらに発表後には、選定委員や選定顧問から多くの論説が寄せられた。まず新聞において、佐々木信綱は、選定は日本文化史、日本精神史上、歴史的意義が最も深く、士気の鼓舞、銃後国民の潤いに多大の効果があると信じる[四六]と述べている。また井上司朗は、選定の意義は和歌の本流への還元により日本文学の根本的動向を明示した点、選ばれた百首が国民大衆の間に普及することによって自ずと国内の世界観が統一される点にある[四七]と愛国百人一首の選定を評価している。他にも複数の選定委員[四八]や陸軍中将の論説[四九]も確認できる。また茅野雅子、今井邦子は新作の短歌を寄せ[五〇]、愛国百人一首の完成を祝っている。

次に雑誌においては、『文藝春秋』で下村海南が愛国百人一首を「大東亜戦が生むありがたい副産物」と表現しており[五一]、同誌のコラムは愛国百人一首の選定を「聖代の文化的慶事」と賞賛している[五二]。また愛国百人一首に所収されている幕末の勤皇志士や万葉の防人の歌を取り上げ、賞賛を与える論稿も散見された[五三]。

このように愛国百人一首を積極的に賛美する論稿が多い中、特に注目すべきなのが『改造』の佐藤春夫の論文で、愛国百人一首と小倉百人一首の関係の捉え方に他と大きな相違がある。選定委員である太田水穂は「新に出づる愛国百人一首があの小倉百人一首を駆逐して、時局に対応し（後略）」と述べ[五四]、愛国百人一首を小倉百人一首に代わるものとして捉えている[五五]。このような意見は他の論稿においても散見される[五六]。つまり公式見解は「小倉百人一首を排除し、新しく愛国百人一首を選定する」というものである[五七]。これに対し、佐藤春夫は「もし小倉百人一首を抹殺しようがためのものであったとしたならば、自分はもう一往も再往も考へ直してみなければならない。」とし、そして「小倉百人一首の真意を知りさえすれば、これまた一種の愛国百人一首であって、無下に排撃すべきではなく（中略）わが民族の審美観や情操に就て教えるところの多い小倉百人一首をこそ抹殺するどころかその真意を教えるのが適当でもあり必要でもなからうか」と論じ[五八]、小倉百人一首の価値の正当性

を説いている。この論稿も全体的に見れば愛国百人一首を評価するものだが、このように意見の相違がある事実は、当時の厳しい言論統制下にあっても、ある程度の表現の自由が認められていたことを窺わせる[五九]。

これらの論説や談話の愛国百人一首に対する評価は、言論統制下ということもあり、どれも一様に愛国百人一首の完成を祝い、賛美し、また指導精神に役立つことに期待するものであった。そしてこれだけ多くの反響が寄せられたことは、当時の国内で愛国百人一首が大きく注目を集めたことを示唆している。

本節の最後に、愛国百人一首の発表後に出版された関連文献のリストを付しておく。これら文献の数からも当時の反響の大きさを窺い知ることができるであろう[六〇]。

・昭和一七年

○遠藤隆吉『愛国百人一首早わかり』健軍精神普及会

○大澤竹胎『愛国百人一首帖』荻原星文館

○牧野靖史『愛国百人一首』国進社出版部

・昭和一八年

日本文学報国会編『定本愛国百人一首解説』毎日新聞社

日本文学報国会編『愛国百人一首』長樂會出版部

川田順『愛国百人一首評譯』朝日新聞社

藤本桂史『肥後愛国百人一首解説』熊本県教育会

松村英一『愛国百人一首物語』天佑書房

窪田空穂『愛国百人一首』開発社

源元公子『手習愛国百人一首』駿々堂書店

平尾花笠『愛国百人一首手習帖』泰東書道院出版部

○内山雨海『書道愛国百人一首』大新社

☆梅田章『（絵と解）あいこく百人一首』台北：大木書房出版社

☆神郡晩秋『愛国百人一首』大日本出版峯文荘

☆中谷幸次郎『愛国百人一首のこころ』台北：南方圏社

・昭和一九年

田村位岳『漢詩訳愛国百人一首』

印牧すえを『愛国百人一首』大正書院

日本音楽文化協会・日本蓄音機レコード文化協会共編『愛国百人一首歌曲集第一篇』創元社

日本文学報国会編『愛国百人一首年表』協栄出版社

本田平八郎『ONE HUNDRED PATRIOTIC POEMS』北星堂書店

○楠田敏郎『愛国百人一首解説』儀行信託社

第二節　かるたによる普及

小倉百人一首はかるたなどで現在も知られているが、愛国百人一首も例外ではなかった。国民への普及の際、身近で最も効果を上げたと考えられるのがこの“かるた”である。各家庭において愛国百人一首かるたを普及させるために様々な方策が取られた。

第一にかるたの販売が挙げられる。定本とも言うべきかるたは日本玩具統制協会が一九四三年一一月に絵かるた[六一]として発売しているが、かるた化の取り組みは愛国百人一首の発表直後から行われている。例えば『朝日』によれば、当初は昭和一七年一二月八日の大東亜戦記念日の配布を予定していたようである[六二]。しかし実際に発売されたのは一二月二九日であり[六三]、しかもその部数は極めて少なく求められない家庭が多かったために、翌年の一月七日頃に各本屋に配給された[六四]ことが報じられている。つまり一二月八日の予定が二九日までずれこみ、さらにその発売でも部数が非常に少なかったことより、ここからは当時の物資不足の状況を窺うことができる。この状況は発売されたかるたの形態からも知ることができる。当初は読み札、取り札百枚ずつのいわゆる完全な形の百人一首を一円で、読み札、取り札十枚ずつの百人一首を三六銭で販売する予定であった[六五]。しかし翌年一月六日の記事では「なほそれでも買えない場合は（中略）申し込めば一部や二部なら分けてもらえる。並製一部三十六銭。」と報じている[六六]。つまり完全な形での百人一首を作れなかったことが推測できる。このような物資不足の状況下でも愛国百人一首かるたが作成されたということは、当局がこれを重要視し、また国民が切望したということの証拠となるであろう。

かるたは盲人のために「点字かるた」としても作成されている[六七]。これは盲人の社会事業団体洋光会が考案した方法を採用し、盲人中央福祉協会が普及しようとするものであった。一二月二七日には臨時東京第一陸軍病院、失明軍人寮の戦盲勇士に点字かるたが贈呈された。

ここからはこうした盲人の指導精神にも愛国百人一首が用いられたことがわかる。

第二にかるた大会の開催が挙げられる。昭和一八年二月一一日には大日本かるた協会、毎日新聞社等によって紀元節を記念し、大東亜戦争必勝祈願橿原神宮奉納愛国百人一首かるた全国大会が催されている[六八]。川田順の講演や情報局藍澤情報官の祝辞の後、大会が開催され、全国各地からの参加者は二百余名にも上り、その反響の大きさが窺える。

第三に家庭でのかるた大会[六九]を推進するためにラジオを通した取り組み[七〇]も展開しており、昭和一八年一月三日には、ラジオが読み手となっての愛国百人一首家庭かるた競技会が開催されている[七一]。これは誤った詠み方や低俗な節つけを防ぐ目的で行われ、村松翼賛会国民生活動員本部長の「かるた競技の精神」という講演や、競技方法の説明などが行われた。この取り組みは日本放送協会と関係政府部局との打ち合わせによって実現したものであった。

第三節　イベントによる普及

普及のためには種々のイベントも考案された。愛国百人一首発表の翌年の昭和一八年には各百貨店で作品展が催された。例えば東京では新宿伊勢丹において一月五日～一七日に「愛国百人一首展」、日本橋高島屋において一月五日～一〇日に「愛国百人一首展覧会」が行われた[七二]。これらは日本文学報国会、毎日新聞社の主催、文部省、情報局、大政翼賛会の後援で行われたことからもわかるように普及策の一環だったのは明らかである。さらにこれは各著名人の揮毫を集めて開催されたことから、書道を通じての普及とも言うことができる。『毎日（東京）』によれば両会場とも大盛況だったようで[七三]、国民の関心の高さが窺える。またこの売り上げは文学報国会により大日本忠霊顕彰会に献金され[七四]、当時大きな注目を浴びたようである[七五]。また大阪でも阪急百貨店において一月五日～一〇日に「愛国百人一首と挿花展」[七六]、大阪高麗橋三越において一月二六日～三〇日に「愛国百人一首書の展覧会」[七七]が催され、普及策が全国的に展開された。ちなみに愛国百人一首はその包含する精神を評価され、二年後の昭和二〇年初頭にも展示会が開催されている[七八]。これは日本橋三越で行われたもので「愛国百人一首理念昂揚展示会」という名が表す通り、太平洋戦争末期の指導精神に用いられたと言え、愛国百人一首の影響力が窺えよう。

また吟詠講習会や作曲舞踊発表会も開催されている。講習会は昭和一八年一月二二日～二月一六日に読売新聞社講堂で行われ、解説は佐々木信綱、土屋文明が担当していることから、愛国百人一首が用いられたと推測できる。その目的は「決戦下、必勝精神の昂揚に資するため」とされており、『読売報知』はその参加者を紙上で募集している[七九]。また発表会は、文学と音楽を結びつけ、愛国百人一首を目と耳から普及させる意図から昭和一八年五月二一日に日比谷公会堂で行われた[八〇]。

第四節　芸術による普及

愛国百人一首の普及には各方面の芸術が利用され、芸術家も動員された。第一に演劇が挙げられる。例えば松竹は普及委員会の決定に呼応し、大歌舞伎において百人一首に選ばれた歌人の中から劇的波瀾に富んだ人を選んで脚色し、国民演劇参加作品として早急に上演することを決定している[八一]。実際に昭和一八年元旦には選定を記念する劇「梅田雲濱」（郷田惠氏作）が大阪歌舞伎座で行われた。壽三郎、我當ら一流の芸能人が出演し、当時の『毎日（大阪）』[八二]はその模様を写真入りで掲載し、「重大時局下の健全娯楽として異彩を放つている」と紹介している。また東京の歌舞伎座では里見弴、舟橋聖一原作の歌劇愛国百人一首が毎日新聞社の後援、紫篁会、曙会、日本合唱団、松竹国民移動劇団、大東亜交響楽団等の出演で上演されている[八三]。

第二に舞踊による普及も行われた。これは愛国百人一首中の歌に曲や振りを付けたもので、昭和一八年五月二一日に行われた作曲舞踊発表会では国民に向かって啓蒙が図られた。また舞踊関連の書籍[八四]も出版され、その中では佐久良東雄、有村治左衛門、小野老、本居宣長、海犬養岡麻呂の五歌について楽譜や舞踊方法、振り付け意図などが掲載されている。

第三に音楽による普及も挙げられ、愛国百人一首を耳から普及させるため作曲化に力が注がれた。公式の取り組み[八五]としては、愛国百人一首の中から秀逸な歌一〇首が選ばれ、五首を日本音楽文化協会が、五首を各蓄音機会社が作曲を担当した。蓄音機会社とは大東亜、帝蓄、日蓄、ビクター、富士（作曲当時はキング）のことで、各社が専属の作曲家に依頼した[八六]。その結果昭和一八年二月一八日に曲が完成し[八七]、作曲を担当した五会社で録音頒布されることになり[八八]、音盤は情報局認定のもと製作された[八九]。またこれらの歌は第四節で述べた「愛国百人一首作曲舞踊発表会」において用いられたと推測される。他にも大政翼賛会、音楽文化協会の主催によって海犬養岡麻呂作「みたみわれ」の作曲を国民に向け公募している。これは「海ゆかば」に並んで、全国民が斉唱すべき国民歌を新たに制定するためのものであり、その公募は新聞の他に大政翼賛会の機関紙『大政翼賛』にまで及んでいる[九〇]。応募作品は千余りに上り、その後入選歌が選出され、発表会、歌唱指導隊を派遣しての歌唱運動、楽譜の印刷及び配布が計画された[九一]。

また作曲化は民間レベルでも積極的に行われ、一教師や大学職員が作曲を手がけた[九二]。中でも前者は全歌作曲、地元の国民学校での発表会開催などの点で注目を浴び、全国からの反響も大きかったようである[九三]。取り組みが公的機関からでなく民間

からもなされたことは愛国百人一首を受容しようとする国民の姿勢を表すものと言えよう。

これらの他にも額・短冊を用いた取り組み[九四]や、紙芝居[九五]、絵葉書[九六]の存在も確認されている。このように愛国百人一首は文壇のみならず、芸術界の各方面も総動員され、その普及に力が注がれた。

第五節　その他の普及策について

前述したもの以外にも様々な媒体を用いて愛国百人一首は普及されていった。その中でも代表的なものを数点挙げ、考察を加える。

第一に教育が挙げられる。愛国百人一首は普及の観点から実際の教育の場、すなわち各学校の講義においても用いられた。『朝日』[九七]によれば高等科教科書の習字の教材として遣唐使使人母作の歌が用いられており、また『大毎』[九八]の記事では、愛国百人一首普及連絡協議会での決定事項として、国民学校、中等学校の教科書に採用することを文部省で考究する、と伝えている。これがその後実際にそれらの教科書に採用されたかどうかは確認できないが、『進学指導』、『蛍雪時代』[九九]といった進学雑誌に愛国百人一首の評釈が掲載された事実を鑑みると、ある程度重視されたことが推測できる。また愛国百人一首は、その歴史との関連の明白性、包含する精神の高潔さから教育に用いられた例もある。例えば歌誌『鶯』婦人部主任である栗原潔子は「歴史につながりがあるから（愛国百人一首）は僕達には拠り所があって覚えやすい」という百人一首を使用した子供達の言葉を聞き、これこそ絶好の生きた教育資料であると感じたと述べ[一〇〇]、愛国百人一首の教育資料としての有効性を主張している[一〇一]。つまり愛国百人一首普及のために教育が利用され、教育のために愛国百人一首が利用されるという双方向の関係が浮かび上がってくる。こうして愛国百人一首は教育の場において積極的に用いられることとなった。

第二に海外への発信が挙げられる。愛国百人一首の流布対象は国内だけにとどまらず、翻訳され、国外にも向けられた。例えば文学報国会は、独、仏、英、支の各言語に翻訳し、東京中央放送局から海外に向け放送し、また情報局、国際文化振興会と協議の上各国語版数万部を配布することにした[一〇二]。特に注目すべきは、愛国百人一首にドイツ語訳を添え、スターマー大使を通じて独総統ヒトラーに贈呈する、という取り組み[一〇三]で、愛国百人一首はこうして日独友好の象徴としても用いられた。吉海直人も著書の中でその海外版の多さを指摘している[一〇四]。

また中国国民に対しては独自に「愛国精神昂揚日本百人一詩」が作成された。これは漢詩版愛国百人一首とも言えるもので、その目的は日本精神を伝え、同文同種の両民族の文化交流を図ることにあった[一〇五]。この選定顧問には汪精衛など中国政府の要人も多数名を連ねており、南京政府との文化交流に一定の役割を担ったと言える。

第三に類似版の作成が挙げられる。愛国百人一首発表後には、前述した「愛国精神昂揚日本百人一詩」の様に[一〇六]、その選定に影響を受け、いくつかの独自の愛国百人一首が生まれた。例えば発表直後の昭和一七年一二月の『キング』には「聖戦百歌選」と銘打ち、戦時下の著名人作の短歌が掲載されている[一〇七]。その作者は選定委員全一二人や逗子八郎こと井上司朗[一〇八]、など愛国百人一首関係者が多く含まれ、更には連合艦隊司令長官山本五十六の名も確認できる。これはその掲載の時期からは報国会版「愛国百人一首」発表の影響を直接受けて作成されたものと言い切れないが、その関係者が多く関わっていることから、それをある程度意識して作成されたものと考えられる。地方独自の愛国百人一首も生まれ、例えば『読売報知』では昭和一八年に選定された加賀藩士による「藩士愛国百人一首」が紹介されている[一〇九]。また同年には『肥後愛国百人一首解説』[一一〇]という書籍が熊本県教育会より出版されている。これらは報国会版「愛国百人一首」と異なり、地元出身の作者などに限定した百人一首であり、地方版愛国百人一首と言うことができるが、この取り組みは明らかに報国会版「愛国百人一首」の選定及び発表の影響を受けたものと言える。

終章

以上論じてきたように、情報局、大政翼賛会、陸海軍省などの公的機関、文学報国会、新聞社、さらには一般国民の協働のもとに、愛国百人一首は作成された。『大毎』、『東日』の両新聞社は紙面を大きく割き、推薦歌を強く募集し、それに対する国民からの応募は約一二万首にも上った。またその選定には多くの著名人が携わり、長時間にわたって議論が交わされた。発表は各新聞や機関紙などにおいて大々的になされ、その普及活動は言論や美術、音楽など様々な方面において展開された。この愛国百人一首は日本の総力を挙げて作成されたものといっても過言ではなかろう。

精神論を重要視した戦時下の日本は、総力戦を戦う基盤を作

り上げるため、国民の精神動員に尽力しており、この愛国百人一首もその一つであった。つまり愛国百人一首が、指導精神のために作成され、用いられたことは紛れもない事実である。しかし戦時下の文化は全て抑圧され、国民は官製のものを押し付けられたという、一般的な歴史観はある部分ではあてはまらないのではないだろうか。

愛国百人一首は国民からの公募資料を基に作成されており、そこには民意が反映されている。またその内容においても愛国の概念が広義に解釈されており、文学的配慮もなされている。木俣修はこの愛国百人一首について「戦時中もさして行なわれず、まして敗戦後は霧消してしまって、今日誰一人かえるみるものもなくなってしまっている。」と切って捨てている[一一一]。しかし国民は無関心の取り組みに対し、一二万首もの推薦歌を寄せるであろうか。展覧会等に大勢の国民が集まるであろうか。本作品を広く流布させるためには第三章で述べたような普及活動が展開されたわけだが、それらはある程度の成功を収め、国民からの反響も認められた。太平洋戦争下、愛国百人一首ブームは確かに存在したのである[一一二]。

当時の国内は第三次ソロモン海戦の戦果に沸き上がっていた[一一三]。そのような状況下で愛国百人一首は国民に押し付けられたのではなく、むしろその取り組みは歓迎されたと考えられはしないだろうか。ここには当時の世相の一端を見て取ることができよう。

一 これらを動員するための国の方策として代表的なものが、昭和一三年に制定された国家総動員法である。これは国の全力を最も有効に発揮させるためには人的・物的資源を統制運用する必要がある、という観点から政府に広範な権限を与えようとするものであり、これにより日本の総力戦体制の礎が築かれた。同法についての詳細は、小野賢一『太平洋戦争と「国民総動員」』(けやき出版、平成七年)を参照。

二 日本文学報国会とは文筆をもって翼賛に身を挺すべく、昭和一七年六月に設立された政府の外郭団体である。愛国百人一首はその中の短歌部会が担当。報国会の目的は国家の要請に従い、国策の周知徹底、宣伝普及に挺身し、以って国策の施行実践に協力することにあるとされ、愛国百人一首は正にこの目的に沿ったものと言える。(日本文学報国会『文藝年鑑』二六〇三年版(桃蹊書房、昭和一八年、四〜一二頁))。報国会の諸事業については、桜本富雄『日本文学報国会』(青木書店、平成七年)を参照。

三 「愛国百人一首座談会」(『短歌研究』、昭和一八年一月一日)。参加者は佐々木信綱、吉植庄亮、松村英一、石井庄司、井上司朗の五人。

四 北原白秋は昭和一七年一一月二日に死去。結局一度も選定作業に携わることはなかったので、書籍によっては彼を除いて、選定委員を一一人とするものもある。

五 以上、選定委員及び顧問については久米正雄編『定本愛国百人一首解説』(毎日新聞社、昭和一八年)から抜粋。

六 昭和一八年一月一日に『東日』、『大毎』は統合し、『毎日』となった。よってそれ以降については東京版、大阪版を区別して表記する。

七 「愛国百人一首募集」(『東日』、昭和一七年九月一七日、『大毎』、昭和一七年九月一八日)。

八 「愛国百人一首　万葉から幕末までの尽忠歌を　文学報国会で新選」(『東日』、昭和一七年九月一六日)、五島茂「皇国百人一首について」(『大毎』、昭和一七年九月二三日)など。

九 「昭和百人一首　万葉から幕末まで　愛国短歌の珠玉篇」(『読売報知』、昭和一七年九月一六日)。

一〇 石塚修「愛国百人一首　推薦歌に見る反響」(『東日』、昭和一七年一〇月二〇日)、同「愛国百人一首の反響」(『大毎』、昭和一七年一〇月二四日)。

一一 例えば「愛国百人一首『かるた』で普及　応募延歌数十二万首二十日発表」(『大毎』、昭和一七年一一月一〇日)など。ちなみに推薦歌は重複を含めると約七万首であるとされている。(『愛国百人一首』　お正月にはこれで　文報で七萬首から選ぶ」(『朝日』、昭和一七年一〇月二三日)、「愛国百人一首　応募七萬余　厳選の上来月二十日発表」(『読売報知』、昭和一七年一〇月二三日)など。

一二 万葉以前を鹿児島壽蔵、藤澤古實、平安時代を松田常憲、早川幾忠、建武中興より江戸期時代前までを谷鼎、江戸時代を伊藤嘉夫、都築省吾が担当。(前掲、「愛国百人一首座談会」)。

一三 以上、選定会議の様子の詳細は前掲、「愛国百人一首座談会」を参照のこと。

一四 例えば、『大毎』は紙面の約半分を使って、百首を掲載している。

一五 例えば、昭和一七年八月には歌人の金子薫園が『皇国百人一首』を文明社から出版しており、これは報国会版「愛国百人一首」の先駆をなすものである。(島内景二「「老いらくの恋」の純愛歌人は、愛国歌人だった」〈川田順『愛国百人一首』河出書房新社、平成一七年、一六九～一七〇頁〉)。

一六 川田順(一八八二～一九六六)は東大英文科に学び、『心の花』の同人として佐々木信綱に師事し、短歌に目覚める。卒業後は住友財閥の幹部として活躍するも、昭和一一年に辞職。にわか愛国者ではなく、「愛国」という言葉を最も広い意味で理解していた、一貫した愛国者。(前掲、川田順『愛国百人一首』〈河出書房新社、平成一七年〉)。

一七 「愛国百人一首」(『キング』、昭和一五年一一月一日)。

一八 川田版の評釈本は、『愛国百人一首』(大日本雄弁講談社、昭和一六年)、報国会版のそれは『愛国百人一首評釈』(朝日新聞社、昭和一八年)である。

一九 報国会版『愛国百人一首』がその対象期間を幕末まで、としたのに対し川田版『愛国百人一首』では明治時代までが含まれた。他にも江藤新平、西郷隆盛、与謝野鉄幹などの歌も所収されている。

二〇 島内景二はこの川田版『愛国百人一首』について、美しい日本の国土、誇るべき都の美観、親子や主従や親友の間のうるわしい情愛、これらの感情も愛国精神と捉えており、ここが狭い意味での愛国歌ばかりを網羅した報国会版愛国百人一首と異なる点である、として報国会版「愛国百人一首」の「愛国」の概念の狭さを強調している。(前掲、島内「「老いらくの恋」の純愛歌人は、愛国歌人だった」〈川田『愛国百人一首』、一七八頁〉)。

二一 「愛国百人一首」(『キング』、昭和一六年二月一日)。

二二 例えば、伊藤嘉夫は「百人一首というのが、一つのまとまりとして格好であるために、小倉百人一首に模擬した、百人一首が現れるようになった。(中略)異種百人一首は、百種にも上ろうとした。」と、その種類の多さを指摘している。(伊藤「百人一首と佐々木信綱・愛国百人一首前後」〈吉海直人編『百人一首研究資料集第六巻論文集』、平成一六年、クレス出版、七九頁〉)。

二三 窪田空穂「緒論」(前掲、『定本愛国百人一首解説』)。

二四 前掲、五島茂「皇国百人一首について」。他にも下村海南は、死亡時が明治元年以前と以後との前後により、その間で取捨を区別することには議論の余地がある、と指摘している。(下村「愛国百人一首」〈『文藝春秋』、昭和一八年一月一日〉)。

二五 前掲、「愛国百人一首座談会」。

二六 前掲、窪田「緒論」。

二七 これに対し研究者の中には異議を唱える者があるが、これについては第二節において述べることにする。

二八 前掲、窪田「緒論」。

二九 遣唐使使人母、安部女郎、成尋阿闍梨母、野村望東尼の四人。

三〇 前掲、「愛国百人一首座談会」。

三一 前掲、窪田「緒論」。

三二 詳しい時代区分については久米正雄編『愛国百人一首年表』(協栄出版社、昭和一九年)、西内雅『国魂：愛国百人一首の解説』(錦正社、昭和六〇年)を参照のこと。

三三 前掲、「愛国百人一首座談会」。

三四 代表的な歌としては次のようなものが挙げられる。

天皇忠誠：君が代を思ふ心のひとすぢに
　　吾が身ありとはおもはざりけり　梅田雲濱

天皇礼賛：大君は神にしませば天雲の
　　雷の上にいほりせるかも　柿本人麻呂

戦意高揚：君が代はいはほと共に動かねば
　　砕けてかへれ沖つしら波　伴林光平

国土愛：あをによし奈良の京は咲く花の
　　にほふがごとく今さかりなり　小野老

家族愛：旅人の宿せむ野に霜降らば
　　吾が子羽ぐくめ天の鶴群　遣唐使使人母

なお、各歌とその内容との対応関係については天皇忠誠(〇)、天皇礼賛(●)、戦意高揚(×)、国土愛(△)、家族愛(▲)、その他(□)として、付録において表すので参照されたい。

三五 木俣修『昭和短歌史(三)』(講談社、昭和五三年、一三三頁)。

三六 島内景二も愛国百人一首を、狭い意味での愛国歌ばかりを網羅している、と評している。(前掲、島内「「老いらくの恋」の純愛歌人は、愛国歌人だった」一七八頁)。

三七 前掲、『定本愛国百人一首解説』、前掲、「愛国百人一首座談会」。

三八 「一億挙つて詠はん　新装カルタも新年に間に合う　多彩な普及陣営整ふ」(『東日』、昭和一七年一一月二三日)。

三九 「愛国百人一首」(『週報』、昭和一七年一二月二三日)。

四〇 「愛国百人一首評釈」(『東日』、昭和一七年一一月二二日～一二月一三日)全二〇回、(『大毎』、昭和一七年一一月二二日～一二月一六日)全二一回。

四一 「愛国百人一首抄」(『大毎』、昭和一七年一一月二五日～一二月一二日)全一〇回。

四二 「愛国百人一首」(『朝日』、昭和一七年一一月二一日～一二月

一六日)全二〇回。

四三 例えば堂本印象や中村岳陵は実績が評価され、戦後に文化勲章を受章、文化功労者となっている。

四四 大坪草二郎「愛国百人一首物語」(『家の光』、昭和一八年二月一日)。

四五 例えば、宏覚禅師の“末の世の末の末まで我が国はよろづの国にすぐれたる国”という歌を用いて「国体明徴」の重要性が示されている。

四六 佐々木信綱「歴史的意義　思想、感情の尊き伝統」(『東日』、昭和一七年一一月二一日)、同「戦時生活を鼓舞　歴史的意義について」(『大毎』、昭和一七年一一月二一日)。

四七 井上司朗「歌の本流へ還る　この企画の重大なる意義」(『東日』、昭和一七年一一月二一日)、同「歌の本流へ還る」(『大毎』、昭和一七年一一月二一日)。

四八 斉藤茂吉「作歌の動機　選定についての感想」(『東日』、昭和一七年一一月二一日)、斉藤瀏「愛国百人一首　先進の心を継承　戦勝を開くものへの一石」(『読売報知』、昭和一七年一一月二一日)、尾上柴舟「平安朝より吉野朝へ　戦につれて　ほとばしる至誠至忠の念」(『朝日』、昭和一七年一一月二一日)、土屋文明「驚異的反響」(『大毎』、昭和一七年一一月二一日)など。

四九 渡邊刀水「君国を思ふ　愛誦すべき烈士の詞藻」(『朝日』、昭和一七年一一月二一日)。

五〇 『東日』、『大毎』(昭和一七年一一月二一日)より。

茅野雅子作“国おもふ心おのづと流れいでて
　　歌の火となり世をてらすかも”

“千年の後ののちまでこのかるた
　　やまとの国のみ霊と生きむ”

“日のもとの民のこころの焔とも
　　火ともなりつつもゆるこのうた”

今井邦子作“民衆に親しみ読まれ一国の
　　理念浄化まる愛国百人一首”

“かかる御時代に生れ合せて国を念ふ
　　百人一首一目にぞ見し”

“国を念ふ誠の歌は烈烈と
　　世の邪つ道を浄め正さむ”

五一 前掲、下村「愛国百人一首」。

五二 「短歌」(『文藝春秋』、昭和一八年一月一日)。

五三 河野省三「皇道精神と歌道」(『短歌研究』、昭和一七年一二月一日)、谷馨「歌心の誠」(『文藝春秋』、昭和一八年四月一日)。

五四 太田水穂「国民操志の培養へ　“愛国百人一首”の意義」(『朝日』、昭和一七年一一月一四日)。

五五 また国民に対し推薦歌を募集した際にも「小倉百人一首に代わる新しきものとして」愛国百人一首を選定する、と謳っている。(前掲、「愛国百人一首募集」)。

五六 例えば、下村海南は愛国百人一首は「歌かるたには小倉百人一首に取つて代はるべきである。」と断じている。(前掲、下村「愛国百人一首」)。

五七 事実、色恋の歌が多く含まれる小倉百人一首を公式のかるた大会で用いることは、国家非常時、国民総動員下にふさわしくない、とされて、苦肉の策として愛国百人一首が用いられたという経緯もあるようだ。(伊藤秀文「小倉百人一首　かるたの歴史と遊び」《別冊太陽百人一首》、昭和四七年一二月一日)。

五八 佐藤春夫「愛国百人一首小論」(『改造』、昭和一八年六月一日)。

五九 『読売報知』もこうした佐藤春夫の姿勢を評価している。(『読売報知』、昭和一八年五月三〇日)。

六〇 ○印は当時の新聞広告から抜粋したもの。☆印は前掲、島内「『老いらくの恋』の純愛歌人は、愛国歌人だった」を参考にした。

六一 西澤笛畝の絵かるた『愛国百人一首』(日本玩具統制協会、昭和一八年)。

六二 “『愛国百人一首』　八日から全国へ　帝都は一町内会に二箱あて」(『朝日』、昭和一七年一二月六日)。

六三 「武士道精神で戦へ　“愛国かるた”の競技法決る」(『朝日』、昭和一七年一二月三〇日)。

六四 「「戦時生活　今日のおしらせ」愛国百人一首」(『朝日』、昭和一八年一月六日)。

六五 「愛国百人一首かるた　お正月を迎え店頭へ」(『朝日』、昭和一八年一二月一八日)。

六六 前掲、「「戦時生活　今日のおしらせ」愛国百人一首」。

六七 「盲人さんも楽しめる　点字カルタ愛国百人一首」(『東日』、昭和一七年一二月二八日付夕刊)、「触感でとる『点字かるた』　盲人へ贈る　愛国百人一首競技盤」(『大毎』、昭和一七年一二月二七日)。

六八 “決戦へ巨歩”　紀元節・一億の誓ひ新た　愛国かるたに敢闘

六九 橿原で全国競技大会」(『毎日(大阪)』、昭和一八年二月一二日)。かるたを行うにあたっては情報局、愛国かるた協会の発起人らの協議の結果、従来の小倉百人一首よりも厳粛な気持ちで競技を行うように「愛国かるた競技七則」が決められた。(「愛国百人異種競技七則　厳粛の裡に堂々と　武士道精神で行ふこと」《読売報知》、昭和一七年一二月三〇日)など)。

七〇 ラジオを通した取り組みとしては他にも、昭和一七年一二月九日から一〇首ずつ一〇日間にわたって全国放送され、また二〇日には井上司朗による「愛国百人一首総覧」が、二一日から五日間にわたって川田順、斉藤瀏、吉植庄亮による解説が放送された。(「愛国百人一首　けふから放送」《東日》、昭和一七年一二月九日)、「愛国百人一首音盤に」《朝日》、昭和一七年一二月一九日)。

七一 「愛国百人一首　正しい詠み方で　あすラジオかるた会」(『毎日(東京)』、昭和一八年一月二日)、“詠み手”はラジオ　あす愛国百人一首家庭競技会」(『毎日(大阪)』、昭和一八年一月二日)など。『読売報知』は「(前略)戦闘機のたたかひに似た真剣さのうちに愛国の至情をかき立てつつ進められていく」として、その指導精神への有効性を認めている。(「愛国かるた競技会」《『読売報知』、昭和一八年一月四日)。

七二 「愛国百人一首展　新宿伊勢丹」、「愛国百人一首展覧会　日本橋高島屋」(『毎日(東京)』、昭和一八年一月五日付夕刊〈広告〉)。

七三 「愛国百人一首展　書家、文人の揮毫集めて」(『毎日(東京)』、昭和一八年一月六日)。

七四 同上。

七五 前掲、桜本富雄『日本文学報国会』。

七六 「愛国百人一首と挿花展　阪急百貨店」(『毎日(大阪)』、昭和一八年一月五日付夕刊〈広告〉)。

七七 「愛国百人一首　書の展覧会　大阪高麗橋三越」(『毎日(大阪)』、昭和一八年一月二六日付夕刊〈広告〉)。

七八 日本文学報国会、日本美術報国会主催、情報局の後援で二月一七日～三月四日に開催。(「愛国百人一首作品展」《読売報知》、昭和二〇年二月一五日)、「愛国百人一首展覧会」《朝日》、昭和二〇

年二月一五日)。

七九 「愛国吟詠講習会」(『読売報知』、昭和一八年一月一四日)。

八〇 「百人一首作曲発表会」(『朝日』、昭和一八年五月二一日)。

八一 「愛国百人一首　年末迄に『かるた』に　劇に書画展に多彩な普及計画　評釈定本は文報編で本社が発行」(『大毎』、昭和一七年一一月二三日)。松竹は他にも映画、歌劇演芸などを用いることを計画している。

八二 「『愛国百人一首劇』の魁け　梅田雲濱は叫ぶ　君が代を思ふ心」(『毎日(大阪)』、昭和一八年一月五日)。またこの記事によると、この作品は国民精神鼓吹の意味で関西側「選奨国民演劇」の候補作品に挙げられたようである。

八三 前掲、桜本富雄『日本文学報国会』、三〇〇頁。

八四 印牧すえを『愛国百人一首』(大正書院、昭和一九年)。

八五 作曲に関する懇談会には蓄音機レコード文化協会、音楽文化協会、音盤文化協会の他に、情報局、文学報国会からも出席しており、また普及委員会でも、愛国百人一首発表当初から計画中であった。

八六 日本音楽文化協会は清瀬保二、草川信、弘田龍太郎、蓑作秋吉、山田耕筰の五氏に委嘱、各蓄音機会社からは河内秀雄、小松清、佐々木すぐる、深海善次、飯田三郎が担当。(日本音楽文化協会・日本蓄音機レコード文化協会共編『愛国百人一首歌曲集第一篇』(日本音楽文化協会、昭和一九年))。それぞれの対応関係については以下を参照されたい。

歌	作者	作曲者	所属
皇は神にしませば	柿本人麻呂	清瀬	音楽文協
千萬の	高橋蟲麻呂	河内	大東亜
わが背子は	阿部女郎	山田	音楽文協
あおによし	小野老	深海	ビクター
山はさけ	源実朝	草川	音楽文協
しきしまの	本居宣長	弘田	音楽文協
身はたとひ	吉田松陰	箕作	音楽文協
岩が根も	有村次左衛門	佐々木	日蓄
天皇に仕えまつれと	佐久良東雄	飯田	富士
しづたまき	兒島草臣	小松	帝蓄

八七 「一億挙つて唱はん　愛国百人一首　十首の作曲決る」(『毎日(東京)』、昭和一八年二月一九日)。

八八 「百人一首作曲成る」(『朝日』、昭和一八年三月六日)。

八九 『読売報知』にはビクターから発売された愛国百人一首レコードの広告が掲載されている。唄は四家文子、留田武が担当し、収録歌は「あおによし」、「身はたとひ」。「日本民族の血に訴える感激声！」という文句で販売促進を狙っている。(「情報局認定　愛国百人一首　ビクターレコード」(『読売報知』、昭和一八年五月二三日付夕刊))。また『朝日』においても、富士音盤『愛国百人一首』(『朝日』、昭和一八年五月七日付夕刊、五月二一日付夕刊))。

九〇 「〝みたみわれ〟の作曲を募集」(『読売報知』、昭和一八年一月一四日)、「国民の歌「みたみわれ」作曲募集」(『大政翼賛』、昭和一八年一月一三日、二月三日)。

九一 『み民われ』の曲発表　近く全国的に歌唱指導」(『大政翼賛』、昭和一八年五月五日)。

九二 村井恒雄については「愛国百人一首　各別に全首を作曲　心魂傾ける農民歌の作者村井氏」(『毎日(大阪)』、昭和一八年一月七日付夕刊)、「愛国百人一首　全歌を作曲　若き中学教諭の熱情」(『毎日(東京)』)、昭和一八年一月七日)。河部繁一については「愛国百人一首〝朗詠曲〟成る　神戸商大学生主事河部氏の苦心作」(『毎日(大阪)』、昭和一八年一月八日)。

九三 『毎日(大阪)』では、教諭への期待と反響は激励、照会の手紙となり毎日のように届けられている、と紹介している。(「愛国百人一首作曲　既に成る一七首　全国の激励に村井氏の精進」(『毎日(大阪)』、昭和一八年一月二一日付夕刊))。

九四 文学報国会、宣伝文化協会、展示宣伝協会が協力して行った取り組みで、愛国百人一首の額、短冊が帝都下の商店、飲食店に掲げられた。(「初春に〝愛国百人一首〟の額・短冊」(『読売報知』、昭和一七年一二月一八日付夕刊)、「必勝正月　飾窓に〝愛国百人一首〟」(『朝日』、昭和一七年一二月一八日付夕刊)など)。

九五 紙芝居『物語愛国百人一首』。題字は斉藤瀏が担当。昭和一八年八月に日本教育紙芝居協会が製作。日本文学報国会の推薦を得て、出版している。(前掲、桜本富雄『日本文学報国会』)。

九六 吉海直人『百人一首への招待』(筑摩書房、平成一〇年)。

九七 「国語に「軍神の書簡」　国防・産業技術に備える「図画」　高等科教科書成る」(『朝日』、昭和一八年一〇月一五日)。

九八 「愛国百人一首　教科書へ採用　普及に文部省でも考究」(『大毎』、昭和一七年一二月五日)。

九九 両誌の新聞広告欄にはそれぞれ愛国百人一首評釈が掲載されている旨の記述が確認できる。(「『進学指導』一月号」、「『蛍雪時代』一月号」(『毎日(東京)』、昭和一八年一月二日など))。

一〇〇 栗原潔子「愛国百人一首歌留多をとって　生きた教育」(『朝日』、昭和一八年一月二日)。

一〇一 また選定委員の吉植庄亮は座談会において、各職場における少年工の不良化に対する策として、「愛国百人一首を大いにやらせて寄宿舎でも盛んに対抗試合をやらせる。そして今度は文学報国会の短歌部の人達を動員して解説を聞かせる。そうすれば一つの娯楽にもなり得るし、また識欲が旺盛な時期だから、愛国の念を植えつけることができる。これは不良化防止に一番効果的ではないか。」と述べ、教育、青少年の健全育成への活用を提唱している。(前掲、「愛国百人一首座談会」)。

一〇二 「やがて共栄圏に愛誦　み民われの大和心　愛国百人一首を四国語に翻訳」(『朝日』、昭和一八年二月一六日)。

一〇三 「「郷土色」　と総統に「愛国百人一首」」(『読売報知』、昭和一八年四月九日付夕刊)。

一〇四 愛国百人一首は国家政策に迎合するものであったため、発表後二年のうちに四〇種以上ものテキストが出版され、台湾・満州・朝鮮といった占領地はもとより中国語・マレー語、英語に翻訳されたものまで出版されている、と論じている。(吉海直人『百人一首への招待』、(精興社、平成一〇年)、九一頁)。

一〇五 『「愛国百人一詩」　けふ最後の厳選　書道展や吟詠会も計画』(『毎日(東京)』、昭和一八年一月一三日)。

一〇六 大東文化学院次長土屋竹雨はその選定の動機として、愛国百人一首に刺激されたことを挙げている。(「漢詩の愛国百人首　汪氏らも顧問に　『東華』同人が選定　管公、山陽らの作を中国の大衆に贈る」(『大毎』、昭和一七年一二月二四日))。

一〇七 「聖戦百家選」(『キング』、昭和一七年一二月一日)。

一〇八 前掲、島内『老いらくの恋』の純愛歌人は、愛国歌人だった」、一七一頁。

一〇九 森山啓「「地方の意気」　名は無くも……　加賀人の意気軒昂」

（『読売報知』、昭和一九年一月八日）。
一一〇 藤本桂史『肥後愛国百人一首解説』（熊本県教育会、昭和一八年）。
一一一 前掲、木俣修『昭和短歌史(三)』、一三三頁。
一一二 同様のものとして日中戦争下の昭和一二年には「忠君愛国百人一首」が生まれている。しかしそれは不評だったようで、その理由として北岡伸一は上海事変時にブームとなった爆弾三勇士と比較し、「満州事変が犠牲者の数では軽微であったのに対し、日中戦争ははるかに深刻だったからだろう。」と指摘している。（北岡伸一『日本の近代五　政党から軍部へ』（中央公論新社、平成一一年）、三六〇頁）。
一一三 前掲、桜本富雄『日本文学報国会』、二九五頁。

付録　愛国百人一首総覧

● 大君は神にしませば天雲の
　雷の上にいほりせるかも　　柿本人麻呂

△ 大宮の内まで聞こゆ網引すと
　網子ととのふる海人の呼び声　　長奥麻呂

● やすみししわが大君の食国は
　大和も此処も同じとぞ念ふ　　大伴旅人

× 千萬の軍なりとも言挙げず
　取りて来ぬべき男とぞ思ふ　　高橋蟲麻呂

× をのこやも空しかるべき萬代に
　語りつぐべき名は立てずして　　山上憶良

□ ますらをの弓末振り起し射つる矢を
　後見む人は語りつぐがね　　笠金村

○ あしひきの山にも野にもみ狩人
　さつ矢手挟みみだれたり見ゆ　　山部赤人

▲ 旅人の宿せむ野に霜降らば
　吾が子羽ぐくめ天の鶴群　　遣唐使使人母

▲ わが背子はものな思ほし事しあらば
　火にも水にも吾なけなくに　　安倍女郎

● み民吾生けるしるしあり天地の
　栄ゆる時にあへらく思へば　　海犬養岡麿

○ 大君の命かしこみ大船の
　行きのまにまに宿りするかも　　雪宅麻呂

△ あをによし奈良の京は咲く花の
　にほふがごとく今さかりなり　　小野老

○ 降る雪の白髪までに大君に
　仕えまつれば貴くもあるか　　橘諸兄

● 天の下すでに覆ひて降る雪の
　光を見れば貴くもあるか　　紀清人

△ 新しき年のはじめに豊の年
　しるすとならし雪のふれるは　　葛井諸會

× 唐国に往き足らはして帰り来む
　ますら武雄に御酒たてまつる　　多治比鷹主

● すめろぎの御代栄えむと東なる
　みちのく山にくがね花咲く　　大伴家持

○ 大君の命かしこみ磯に觸り
　海原渡る父母をおきて　　丈部人麻呂

▲ 眞木柱ほめて造れる殿のごと
　いませ母刀自面変りせず　　坂田部麿

○ 霰降り鹿島の神を祈りつつ
　皇御軍に吾は来にしを　　大舎人部千文

○ 今日よりはかへりみなくて大君の
　しこの御盾と出で立つ吾は　　今奉部與曾布

○ 天地の神を祈りてさつ矢ぬき
　筑紫の島をさして行く吾は　　大田部荒耳

▲ ちはやぶる神の御坂に幣奉り
　齋ふいのちは母父がため　　神人部子忍男

× 翁とてわびや居らむ草も木も
　栄ゆる時に出でて舞ひてむ　　尾張濱主

□ 海ならずたたへる水の底までも
　清き心は月ぞ照らさむ　　菅原道真

● 山のごと坂田の稲を抜き積みて
　君が千歳の初穂にぞ舂く　　大中臣輔親

▲ もろこしも天の下にぞ有りと聞く
　照る日の本を忘れざらなむ　　成尋阿闍梨母

● 君が代はつきじとぞ思ふ神風や
　みもすそ川のすまむ限は　　源経信

● 君が代は松の上葉におく露の

つもりて四方の海となるまで　源俊頼

●君が代にあへるは誰も嬉しきを
花は色にも出でにけるかな　藤原範兼

△み山木のその梢とも見えざりし
櫻は花にあらはれにけり　源頼政

●宮柱したつ岩根にしき立てて
つゆも曇らぬ日の御影かな　西行法師

●君が代は千代ともさざし天の戸や
出づる月日のかぎりなければ　藤原俊成

△昔たれかかる櫻の花を植えて
吉野を春の山となしけむ　藤原良経

○山はさけ海はあせなむ世なりとも
君にふた心わがあらめやも　源実朝

○曇りなきみどりの空を仰ぎても
君が八千代をまづ祈るかな　藤原定家

△末の世の末の末まで我が国は
よろづの国にすぐれたる国　宏覚禅師

×西の海よせくる波も心せよ
神の守れるやまと島根ぞ　中臣祐春

×勅として祈るしるしの神風に
寄せくる浪はかつ砕けつつ　藤原為氏

×命をばかろきになして武士の
道よりおもき道あらめやは　源致雄

○限なき恵を四方にしき島の
大和島根は今さかゆなり　藤原為定

○思ひかね入りにし山を立ち出でて
迷ふうき世もただ君の為　藤原師賢

○君をいのる道にいそげば神垣に
はや時つげて鶏も鳴くなり　津守国貴

○もののふの上矢のかぶら一筋に
思ふ心は神ぞ知るらむ　菊地武時

×かへらじとかねて思へば梓弓
なき数に入る名をぞとどむる　楠木正行

□鶏の音になほぞおどろく仕ふとて
心のたゆむひまはなけれど　北畠親房

×いのちより名こそ惜しけれ武士の
道にかふべき道しなければ　森迫親正

△あふぎ来てもろこし人も住みつくや
げに日の本の光なるらむ　三條西實隆

×あぢきなやもろこしまでもおくれじと
思ひしことは昔なりけり　新納忠元

△富士の嶺に登りて見れば天地は
まだいくほどもわかれざりけり　下河邊長流

△行く川の清き流れにおのづから
心の水もかよひてぞすむ　徳川光圀

△ふみわけよ日本にはあらぬ唐鳥の
跡をみるのみ人の道かは　荷田春満

○大御田の水泡も泥もかきたれて
とるや早苗は我が君の為　加茂眞淵

△もののふの兜に立つる鍬形の
ながめ柏は見れどあかずけり　田安宗武

●すめ神の天降りましける日向なる
高千穂の嶽やまづ霞むらむ　楫取魚彦

●天の原てる日にちかき富士の嶺に
今も神代の雪は残れり　橘枝直

×千代ふりし書もしるさず海の国の
まもりの道は我ひとり見き　林子平

○我を我としろしめすかやすべらぎの
玉のみ声のかかる嬉しさ　高山彦九郎

△あし原やこの国ぶりの言の葉に
栄ゆる御代の声ぞ聞こゆる　小澤盧庵

△しきしまのやまと心を人とはば
朝日ににほふ山ざくら花　本居宣長

○初春の初日かがよふ神国の
神のみかげをあふげ諸　荒木田久老

△八束穂の瑞穂の上に千五百秋
国の秀見せて照れる月かも　橘千蔭

△香具山の尾上に立ちて見渡せば
大和国原早苗とるなり　上田秋成

△遠つ祖の身によろひたる緋縅の
面影浮かぶ木々のもみぢ葉　蒲生君平

●かけまくもあやに畏きすめらぎの
神のみ民とあるが楽しき　栗田土満

□ 大日本神代ゆかけて傳へつる
雄々しき道ぞたゆみあらすな　賀茂季鷹

△ 青海原潮の八百重の八十国に
つぎてひろめよ此の正道を　平田篤胤

× 一方に靡きそろひて花すすき
風吹く時ぞみだれざりける　香川景樹

● 安見ししわが大君のしきませる
御国ゆたかに春は来にけり　大倉鷲夫

× かきくらすあめりか人に天つ日の
かがやく邦のてぶり見せばや　藤田東湖

△ わが国はいともたふとし天地の
神の祭をまつりごとにて　足代弘訓

○ 君がため花と散りにしますらをに
見せばやと思ふ御代の春かな　加納諸平

● 大君の宮敷きましし橿原の
うねびの山の古おもほゆ　鹿持雅澄

○ 大君のためには何か惜しからむ
薩摩のせとに身は沈むとも　僧月照

○ 大君の御贄のまけと魚すらも
神代よりこそ仕へきにけれ　石川依平

○ 君が代を思ふ心のひとすぢに
吾が身ありとはおもはざりけり　梅田雲濱

△ 身はたとひ武蔵の野邊に朽ちぬとも
留めおかまし日本魂　吉田松陰

△ 岩が根も砕かざらめや武士の
国の為にと思ひ切る太刀　有村次左衛門

× 鹿島なる師霊の御剣を
こころに磨ぎて行くはこの旅　高橋多一郎

▲ 天皇に仕へまつれと我を生みし
我がたらちねぞ尊かりける　佐久良東雄

× 天ざかる蝦夷をわが住む家として
並ぶ千島のまもりともがな　徳川斉昭

○ 朝廷邊に死ぬべきいのちながらへて
帰る旅路の憤ろしも　有馬新七

○ 大君の御旗の下に死してこそ
人と生れし甲斐はありけれ　田中河内介

○ しづたまき数ならぬ身も時を得て
天皇がみ為に死なむとぞ思ふ　兒島草臣

○ 君がため命死にきと世の人に
語り継ぎてよ峰の松風　松本奎堂

○ 天皇の御楯となりて死なむ身の
心は常に楽しくありけり　鈴木重胤

□ 曇りなき月を見るにも思ふかな
明日はかばねの上に照るやと　吉村虎太郎

× 君が代はいはほと共に動かねば
砕けてかへれ沖つしら波　伴林光平

○ ますらをが思ひこめにし一筋は
七生かふとも何たわむべき　澁谷伊與作

△ みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ
舟より遠くものをこそ思へ　佐久間象山

□ 執り佩ける太刀の光はもののふの
常に見れどもいやめづらしき　久坂玄瑞

○ 大君の御楯となりて捨つる身と
思へば軽き我が命かな　津田愛之助

● 青雲のむかふす極すめろぎの
御い威かがやく御代になしてむ　平野國臣

□ 大山の峰の岩根に埋めにけり
わが年月の日本だましひ　眞木和泉

× 片敷きて寝ぬる鎧の袖の上に
思ひぞつもる越の白雪　武田耕雲齋

□ 武夫のたけきかがみと天の原
あふぎ尊め丈夫のとも　平賀元義

× 後れても後れてもまた君たちに
誓ひしことをわれ忘れめや　高杉晋作

× 武士のやまと心をより合はせ
ただひとすぢの大綱にせよ　野村望東尼

● 男山今日の行幸の畏きも
命あればぞをろがみにける　大隈言道

△ 春にあけてまづみる書も天地の
はじめの時と讀み出づるかな　橘曙覧